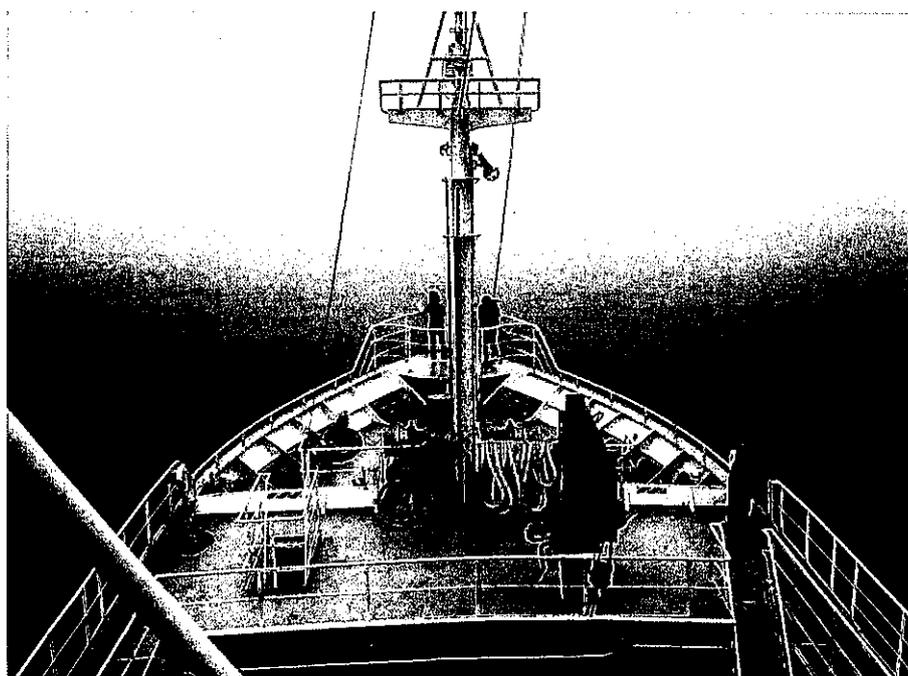


第 5 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(国後島へ向かうロサ・ルゴサ号)

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目次

1	発刊にあたって	-----	1
2	実施要項	-----	2
3	選考について	-----	3
4	入賞者一覧	-----	4
5	表彰式風景	-----	6
6	入賞作品	-----	7

最優秀賞

京都府知事賞	亀岡市立東輝中学校	加藤 優生
京都市長賞	京都市立嵯峨中学校	卯滝 由季

優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	京都府立烏羽高等学校	坪内 駿光
京都市教育委員会教育長賞	京都市立京都御池中学校	山田 剛大
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立嵯峨中学校	黒田 真衣
北方領土問題対策協会理事長賞	宮津市立日置中学校	吉田 達哉
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立西京高等学校附属中学校	竹内 美晴
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	宮津市立養老中学校	泉 梨沙
京都新聞社賞	京都市立北野中学校	田口 千裕
京都新聞社賞	綾部市立豊里中学校	大槻 佳奈子
KBS京都賞	京都市立洛北中学校	藤 小百合
KBS京都賞	南丹市立園部中学校	岡 英里奈

佳作	京都市立京都御池中学校	川口 麗奈
佳作	京都市立西京高等学校附属中学校	三木 杏珠
佳作	京都市立藤森中学校	荒木 萌子
佳作	京都市立大淀中学校	吉田 凌祐
佳作	京都市立弥栄中学校	橋本 霞
佳作	亀岡市立東輝中学校	大西 佑佳
佳作	宮津市立栗田中学校	飯田 雅哉
佳作	京丹波町立瑞穂中学校	岩崎 恭吾
佳作	綾部市立豊里中学校	柴田 壮悦
佳作	京都府立園部高等学校附属中学校	柴田 愛澄
佳作	京都府立洛北高等学校附属中学校	中西 光歩

発刊にあたって

この「北方領土と私たち」作文コンクールもおかげさまで、今年度、第五回を迎えることができました。応募点数はこれまでで最も多い1900点以上に達しました。これは北方領土問題に取り組んでいた学校や先生が増えたと同時に、関心をもってくれている中学・高校生が増えてきた証だと思います。

平成一八年度の第一回以来、この作文コンクールは回を重ねるごとに充実してまいりましたが、今回は審査をして大きく違う印象をもちました。応募数が増えた、原稿用紙三枚分しつかり書くようになってきたという表面的なことだけではなく、内容的に深まりをもってきたことです。それは各自の主張がはっきりしてきたといってもいいでしょう。

昨年十一月にロシアのメドベージェフ大統領が国後島を訪問しました。ちょうどその時期に多くの生徒さんがこの作文に取り組んでいたのです。つまり、大統領の訪問やそれに抗議する元島民の人たちのようすをニュースで見て、そこから考えたことや思い、場合によっては「怒り」も原稿用紙に文字として表してくれているのです。したがって作文を読んでいても引き込まれるものがたくさんあり、審査の上でも「これはしつかり主張している」「これは正面から政府に訴えている」など、賞を決めるのに悩むことが例年以上に多かったです。

これらのことから国民的な返還運動の大切さはいまでもありませんし、特に京都府だけでも二千人近い中学・高校生が北方領土問題を考えてくれていることは返還要求運動にとっても大きな支えになっています。

このように北方領土問題についての学習が広がり、作文コンクールがさらに定着してきましたのは各学校の御理解と御協力のおかげです。あらためて感謝申し上げます。今回も御後援いただきました独立行政法人北方領土問題対策協会、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府中学校長会、京都市中学校長会、京都市町村教育委員会連合会、京都新聞社、KBS京都をはじめ関係者の皆様にも重ねてお礼申し上げます。

先般の大統領の国後島訪問以後、日露関係は必ずしも良好ではありませんが、多くの生徒さんが書いてくれたように「北方領土は日本のものです」と主張し続けることが重要です。次代を担う中高生がこの問題と向き合い、考え、自分たちにできる一歩を踏みだしてくれることが、北方領土問題の解決に確実につながる道であると信じています。

今後とも関係の皆様方の御指導と御支援をお願い申し上げます。発刊の言葉といたします。

平成二十三年二月五日

北方領土返還要求京都府民会議

会長 栗田澄子

京都府北方領土教育者会議

会長 島本由紀

平成22年度

第5回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

1 趣 旨

京都の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心に向け、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。

2 主 催

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

3 後 援

京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
京都府中学校長会・京都市中学校長会
京都府市町村教育委員会連合会
(独立行政法人)北方領土問題対策協会
京都新聞社・KBS京都

3 テーマ 「北方領土と私たち」にかかわる内容であること(題名は自由)

4 募 集

(1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者
(2) 募集締切 平成22年12月17日(金)
(3) 作品規定 原稿用紙(400字詰)3枚以内
(4) 応募先 「北方領土と私たち」作文コンクール担当者

5 審 査 主催者において選定した選考委員により審査

6 表 彰 (1) 賞の設定

最優秀賞 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点
優 秀 賞 10点・京都府教育委員会教育長賞 1点
・京都市教育委員会教育長賞 1点
・北方領土問題対策協会理事長賞 2点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点
・京都新聞社賞 2点
・KBS京都賞 2点

入選・佳作 若干点

(2) 表彰式

平成23年2月上旬

(北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定)

第5回「北方領土と私たち」作文コンクールの選考について

1 応募の状況

応募校	24校	応募点数	1,979点
-----	-----	------	--------

2 選考委員と選考基準

(1) 選考委員会の構成

氏名	所属・役職
栗田澄子	北方領土返還要求京都府民会議会長
能登英夫	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
平山明	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
山本範子	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
松本和久	京都府北方領土教育者会議顧問 (京都府南丹教育局長)
島本由紀	京都府北方領土教育者会議会長 (京都市教育委員会首席指導主事)
西田三郎	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都府南丹教育局総括社会教育主事)
小森誠	京都府北方領土教育者会議事務局長 (京都府教育庁指導部社会教育課社会教育主事)
奥村光太郎	京都府北方領土教育者会議事務局次長 (京都市立大淀中学校教諭)
高垣明夫	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市総合教育センター指導主事)

(2) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心・意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果

別紙の入賞者一覧のとおり

4 選考を終えて

- ・このコンクールも5回目を迎え、今年度は1,900点をこえる応募があった。関係機関ならびに各校の先生方の御理解と御協力に深く感謝したい。
- ・作文の内容をみると、各校での取組や授業内容を反映したもの、生徒の多様な感性でとらえたものが多くみられ、北方領土問題に対する理解の広がりがうかがえた。
- ・今後さらにこの問題への関心・理解が深まるよう啓発活動を進めたい。

第5回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

氏 名	学 校	学 年
最優秀賞（京都府知事賞）		
加 藤 優 生	亀岡市立東輝中学校	2 年
最優秀賞（京都市長賞）		
卯 滝 由 季	京都市立嵯峨中学校	2 年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
坪 内 駿 光	京都府立鳥羽高等学校	3 年
優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）		
山 田 剛 大	京都市立京都御池中学校	1 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
黒 田 真 衣	京都市立嵯峨中学校	2 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
吉 田 達 哉	宮津市立日置中学校	3 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
竹 内 美 晴	京都市立西京高等学校附属中学校	3 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
泉 梨 沙	宮津市立養老中学校	3 年
優秀賞（京都新聞社賞）		
田 口 千 裕	京都市立北野中学校	3 年
優秀賞（京都新聞社賞）		
大 槻 佳 奈 子	綾部市立豊里中学校	2 年
優秀賞（KBS京都賞）		
藤 小 百 合	京都市立洛北中学校	3 年
優秀賞（KBS京都賞）		
岡 英 里 奈	南丹市立園部中学校	3 年

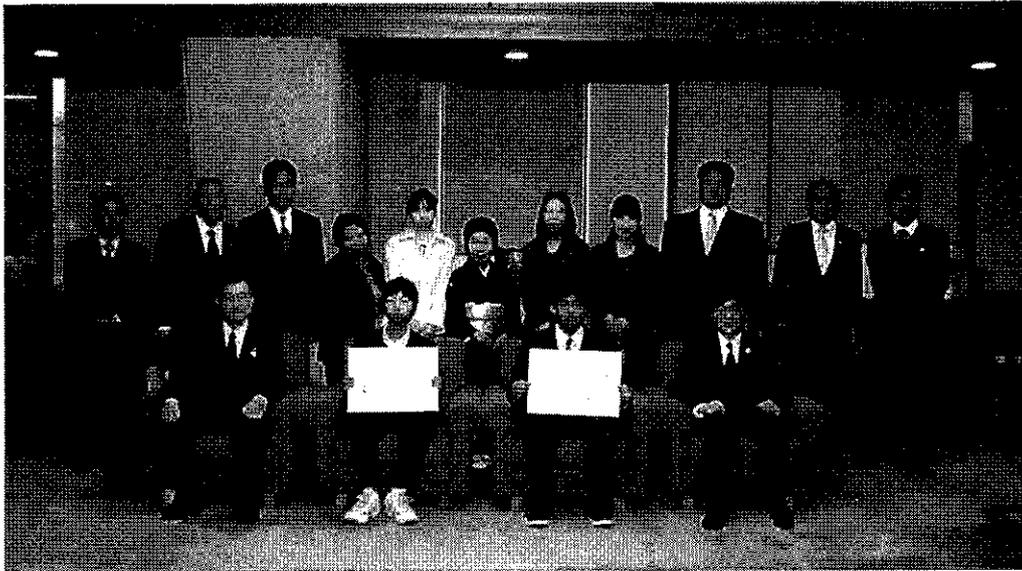
第5回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

氏 名		学 校	学 年
佳 作	川 口 麗 奈	京都市立京都御池中学校	1 年
	三 木 杏 珠	京都市立西京高等学校附属中学校	3 年
	荒 木 萌 子	京都市立藤森中学校	3 年
	吉 田 凌 祐	京都市立大淀中学校	2 年
	橋 本 霞	京都市立弥栄中学校	1 年
	大 西 佑 佳	亀岡市立東輝中学校	2 年
	飯 田 雅 哉	宮津市立栗田中学校	1 年
	岩 崎 恭 吾	京丹波町立瑞穂中学校	1 年
	柴 田 壮 悦	綾部市立豊里中学校	2 年
	柴 田 愛 澄	京都府立園部高等学校附属中学校	3 年
	中 西 光 歩	京都府立洛北高等学校附属中学校	2 年
入 選	菊 池 葵	京都市立北野中学校	3 年
	河 島 千 波	京都市立嗟峨中学校	2 年
	猪 下 美 邑	京都市立向島中学校	2 年
	清 水 和 歩	京都市立京都御池中学校	1 年
	鎌 田 葵	京都市立深草中学校	2 年
	山 本 風 紗	京都市立春日丘中学校	2 年
	井 上 有 希 乃	大山崎町立大山崎中学校	2 年
	谷 口 果 穂	南丹市立殿田中学校	3 年
	奥 村 拓	南丹市立園部中学校	1 年
梅 田 亮 介	京都府立須知高等学校	3 年	

最優秀賞などの表彰式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の表彰式

平成23年 1月21日 京都府庁



太田 昇京都府副知事、田原博明京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育委員会教育長賞の表彰式

平成23年 1月18日 京都市役所



門川大作京都市長、高桑三男京都市教育委員会教育長から賞状が授与されました。

入賞作品

最優秀賞（京都府知事賞）

北方領土を通して領土問題を考える

亀岡市立東輝中学校
二年 加藤 優生

オランダには、バールレ・ナツソー、バールレ・ヘルトホという地域がある。隣国ベルギーの飛び地が点在する、いわば、「共存地帯」である。ここに倣って、日露間の北方領土問題を、さらに、日中尖閣諸島問題をも解決できないだろうか。両国が協力、あるいは共存することで、平和裏に領土問題を解消するため、ここでは北方領土を軸に考えていきたい。

北方領土、すなわち択捉・国後・色丹・歯舞の島々は、元来日本固有の領土だった。江戸時代には、日本人は、既にこの島々の存在を認識していた。このことを考えると、当然これらは日本の領土ということになる。

しかし、戦争が終結して二週間後に、ロシア、当時のソビエト連邦が北方四島に進攻してきた。そして、サンフランシスコ平和条約に調印していないことを理由に、現在に至っても占拠し続けている。

窃盗である。いや、武力を行使しているから強盗と言うべきか。ともかく、日本の領地を奪い、島民を追放し（サハリン抑留、後に強制送還）、平然と生活しているロシア人は、一刻も早く北方領土を返すべきだ。

とは言え、そう簡単な話ではあるまい。格好の漁場をロシアが手放すとも思えないし、何より、授業でも習ったが、そこに生まれたロシア人の子どもから見れば、そこが彼ら

の故郷なのだ。かつてのソ連のように、日本が北方領土を無理に奪還すれば、彼らの故郷を奪うことになる。非常に後味が悪い。ロシア領のままでも、日本領になっても、どちらかが涙を呑む結果になってしまうのだ。

そこで、冒頭に上げた「共存地帯」案に注目してほしい。むしろ、北方領土は、日本のものということを経済社会が認めた事実の下、とりあえず、このことをロシア政府に認めさせる。そして、元島民の方々に北方領土へ帰島してもらおう。だが、ロシア人を追い出すようなナンセンスなことではない。共に住むのである。島を分けなければいい、という意見もあるが、それは共存とは言わない。本気で日露の領土問題解決を願うのなら、何の隔たりもいらぬ。長い歴史の中で異なる文化や宗教を寛容的に受容してきた日本だからこそ可能な、最高のプランではないか。日本政府や野党指導者は、国会で揚げ足の取り合いなどしている場合ではない。直ちに6ヶ国協議やG8でロシアと徹底的に話し合うことが解決の糸口であると思う。また、日中の尖閣諸島の問題も、中国に石油資源開発などの既成事実が積み上げられてしまう前に、解決しなくてはならない。こちらは、日本が領土を実効支配しているのだから、遠慮なく抗議していただきたい。

世界中に目を向けると、問題となっている領土は、砂の数ほど存在する。東シナ海のスプラトリー諸島（日本が放棄した。現在6ヶ国が領土を主張している）やグアンタナモ基地（キューバ国内にあるアメリカ基地）などもそれと言える。

領土問題は、時に戦争を起こす。最悪の事態になる前に互いに協力・共存することが、よりよい解決策だと思おう。そのためには、根拠に基づき主張すべきは主張し、交渉することが、今求められている。

最優秀賞（京都市長賞）

私達が出来る返還運動

京都市立嵯峨中学校
二年 刈滝 由季

私は最近あるニュースを聞いて腹が立った。ロシアのメドベージェフ大統領が国後島を訪問したというのだ。しかも、日本に向かつて「北方領土はロシアのものだ。」と主張した。私はなぜ日本固有の領土に、ロシアの大統領が訪問し、自国のものだと主張したのか疑問に思う。新聞によると、ロシア側は日本政府による外交政策の混乱の足元を見て、日本の返還要求をけん制してきたのだという。私は怒りを覚えたのだ。日本固有の領土をロシアに譲る訳にはいかない。何があるかと北方領土は私達の大切な領土なのだ。

私は中学一年の時から、北方領土問題に関心を向けてきた。そして今年の夏、念願の「少年少女北方領土研修」に行ってきた。そこでは、元択捉島民の三上洋一さんに貴重なお話をして頂いた。三上さんは小学生の時、島から追い出され、大変悲しい思いをされた。「島にいたかったらソ連人になれ。」と威されたぐらいなのだ。日本人が追い出された後は、ソ連の学校が建設され、島全体が占領されてしまった。私は三上さんのお話を聞いて、北方領土返還への気持ちに強くなった。

北方領土は豊かな自然や水産資源に恵まれ、エトピリカやヒグマ、アザラシなど沢山の動物が暮らしている。

六十五年前までは、そこにたくさんの日本人が住んでいた訳だ。しかし、一九四五年ソ連が千島列島・北方領土を不法に占領。日本は返還要求運動を行っているが、一向に解決への糸口は見つからない。現在はロシアの領土とされているため、嚴重に警備されている。だから日本人が自由に、北方領土を行き来する事ができない。でも、メドベージェフ大統領が国後島を訪れ、自国の領土だと主張したのも、警備が嚴重にされているのも、日本の不満を承知しているからだと考える。つまり、日本とロシアで充分な話し合いが行われていないという事だ。このまま北方領土問題は絶対に解決しない。どんなに時間がかかっても、両国が納得のいく話し合いを行うべきだ。それでも、日本に北方領土が返還されたとしても、今まで住んでいたロシアの人々が行き場を失うのであれば、「共存」もありだと思ふ。もう二度と三上さんのように北方領土問題で苦しむ人をだしたくない。でも一番は、話し合いで日本に北方領土が返還されることを強く望んでいる。

そのために、私達が出来る事は「一人一人が北方領土問題に関心をもち、声をあげる事」だと考える。北方領土問題は「国民の国の問題」としてとらえなければならぬ。私達が北方領土についての知識を正しく理解し、心を一つにして日本政府の背中を押せる様な原動力となる様に……。その原動力が返還要求への大きなエネルギーとなり、国民の力で北方領土問題が解決する事を私は実現させたい。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

北方領土返還に向けて

京都府立鳥羽高等学校
三年 坪内 駿光

根室沖にある北方領土。それは1855年の日露和親条約により、日本となった島々だ。だが、1945年8月18日、ソ連軍が侵攻し、9月2日のアメリカ戦艦ミズーリでの降伏文章調印後の9月3日に歯舞諸島を占領して、今もまだ不当に占領している。

北方領土全域で、福岡県や千葉県と同じ程度の日本固有の領土が他国の実効支配下にあるというのは、主権を持つ国家として、とうてい許せるものではない。領土、領海だけでなく、豊かな海洋資源なども同時に奪われている。国後島や択捉島は、その一つの島だけで、沖縄県の面積を軽く超えているのである。

北方領土の問題は、決して私たちと無関係ではない。日本は、北方領土以外に竹島でも領土問題を抱えている。ましてや、日本が実効支配している尖閣諸島や、中には、現実に沖縄や対馬といった日本人の住んでいるところを自国領と主張している国さえある。このように、すべての領土問題はつながっていると考える。一箇所であつても、一平方メートルの土地であつても、固有の領土を諦めて、他国のものと認めてしまえば、他の領土問題にも悪影響を与えるのではないかと思う。領土問題においては、絶対に譲歩することは許されない。それこそ、ある

首相経験者の口癖であつた「友愛」だけであつてはならないのだ。自らの国の考え、根拠と基本方針を相手にはつきりと示した上で、交渉に臨まなければならない。それには、国民が領土問題に強い意識を持たなければならない。

毎年、北海道の中学生か高校生かが、日本の首相を訪れ、北方領土について請願書のようなものを渡しているというのをインターネットで見た。しかし、今年は、忙しいという理由で、面会することができなかったとネットのニュースは報じていた。このことは、今の政権が北方領土への意識が低いと言われても仕方ないことだと思ふ。

北方領土は、歴史的にも国際法的にも日本の領土であるということ、疑いようのない事実である。京都は、日本の中程にあり、北方領土からは遠く離れている。また、竹島や尖閣諸島からも遠い。それだけに国境や領土という觀念があまり感じられないと思う。それは、京都だけのことではないのではないだろうか。だからこそ、国民の関心を高めることが重要だ。

そして何よりも、早期返還を実現することが大切である。ロシアが北方領土の埋蔵資源、メタンハイドレードなどの開発を始めたり、交通網整備を本格的に始めれば、返還は、ますます難しくなっていく。国際的にも、ロシアが開発しているクリル諸島という認識が広がると考えられる。ロシアと政治的な交渉ができるのは、政府だけである。国民が声を挙げ、ロシアにその意思を示さなければ、交渉にすらならない。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

北方領土　　～故郷をとりもどすために～

京都市立京都御池中学校
一年　山田　剛大

自分のものなのに他人が我がものというような顔をして使っている。ロシアに占領される以前に北方四島に住んでいた人は、これと近い感情なのではないだろうか。とりかえしたくてもとりかえせないもどかしさや怒り。しかも、そのとられたものは自分の故郷なのだから、さぞかし辛いことだろう。

一九四五年には四島にあわせて一万七千二百九十一人もの人々が住んでいたという。不便ながらも島ではみんな生き生きと暮らしていた。しかし、悲劇はおこる。ロシアに占領され、住んでいた人は島から強制退去を命じられた。それ以来、四島へは特例を除いてビザを取得しないと入れなくなってしまった。例え、墓参りへ行くときでさえもだ。そんなことがあっても良いのだろうか。もし、私の故郷が占領されたら・・・想像するだけでぞっとする。故郷を奪われるということは、大切な場所も思い出も、土地に対する愛さえも奪われることに等しいと思う。残されるのは故郷を奪われた悲しみと、心にとぼっかりと空いた大きな穴だけだ。

しかし、現在、北方領土問題を解決へと導くためにさまざまな取組が行われている。取組は大きく分けて二つある。

一つ目は啓発、署名運動などの一般人への呼びかけである。これは北方領土返還要求強化月間（八月）及び北方領土の日（二月七日）を中心に展開される。

二つ目は北方四島との交流だ。これには旅券・査証なしで訪問できるビザなし交流や四島自由訪問などが含まれている。

このように、私たちでも北方領土問題の解決に協力できることがたくさんある。私も是非、機会があれば参加してみたいと思う。

先程、北方領土返還要求強化月間と北方領土の日についてふれたが、知っている人はどれくらいいるだろうか。北海道に住んでいる人は別として、それ以外の人はあまり知らないのではないかと私は思う。私自身、知らなかったし、今回、北方領土について調べてみなければ一生知らなかったかもしれない。

人間、一人であることは限られている。だから、私にもっと多くの人に北方領土について知ってほしい。故郷を奪われた人たちの魂の叫びを受けとってほしい。私が北方領土問題について知ってほしいのは、日本人に限ったことではない。この問題は世界的には、あまり有名ではない。ロシアの人でも知らない人が多いという。地上でも表記は曖昧なものが多く、ロシア領として北方四島を処理している地図も少なくない。

私はこれから自分にできること、例えば署名活動・下級生に事実を教えるなどを、積極的にしていきたいと思う。

現在、元居住者で生存している人は、七千七百九十七人。

既に五四・九%の人が亡くなっている。一人でも多くの人に故郷の土を踏んでほしい。私はそう思っている。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

四島返還への第一歩

京都市立嵯峨中学校
二年 黒田 真衣

領土問題。この問題が起こる原因は、その土地の資源を得るためだとか、国の権威を高めるためだったりします。何にせよ、自国が他国よりも豊かになりたいという欲望のために起こってしまうのです。北方領土問題も同じです。歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島は水産物の宝庫で、また大自然の美しさは観光産業に活かすこともできます。こんな魅力的な島々ならどんな国だって自国の領土にしたいだろうとは思いません。

しかし、ここに二つの事実があります。一つは「北方領土は日本人が自分たちの手で開拓し、そこにはずっと日本人たちが住んでいた」ということ。二つ目は「北方領土はたった一度も他国の領土になつたことがない」ということです。それなのにロシアは太平洋戦争で日本が大敗して北方領土にまで手が回らないのをいいことに、勝手に日本人たちを追い出して占領しました。それは、日魯通好条約・樺太千島交換条約・ポーツマス条約という三つの条約を全て無視した行為であり、北方領土に住んでいた日本人の「自由に住む権利」奪うという、人間的にも許し難い行為です。私が北方領土問題で一番ロシアが酷いと思う点は、「そこに住んでいる人たちを追い出して、更にその人たちがパスポートとビザなしでは自

分の故郷に帰ることすら出来なくしてしまつた」という点です。幾ら自国が豊かになつてたくても、そこに住んでいる人たちを追い出してまですることではないと思います。それで豊かになつてもロシアの人たちだって、何となく罪悪感を抱いて決してとてもいい気持ちで暮らすことができないと思うのです。そんなことになるくらいなら、早いこと北方領土を日本に返還して、誰でも気持ちよく大自然のそばで暮らせるようにするべきです。

そのために私は、江戸時代の樺太のように北方領土を日本とロシアが共同で住めるようにしたいと思つていました。しかし、それでは政治的問題が発生すると聞きました。なので、万事上手いくようにこの問題を解決するには、北方領土を日本の領土にし、ロシアの人々は日本国籍をとるなりすることが唯一の道だと思いません。

北方領土に住んでいた日本人たちが、日本の国土として、日本から普通に故郷へ帰ることができるようになる日。それを実現するカギは、私たち日本人の一人一人の強い思いと政府間での粘り強い交渉を本気で進めることにあります。日露両国の人々が争い事なく笑顔で北方領土で暮らせることができるように、まず私たちからこの問題を理解し、そして政府に積極的にはたらきかけることが大切だと、私は思うのです。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土問題のバランス

宮津市立日置中学校
三年 吉田 達哉

「尖閣諸島映像流出」と、新聞にも大きく報じられています。僕も嫌になるほど、その報道を見てきました。北方領土問題に関しても、ロシアとの間で大きな問題となつていきます。今になって、メドベージェフ大統領が北方領土を訪問したことが大きく報道されていましたが、この報道によって、北方領土問題について初めて知った国民も多いのではないのでしょうか。僕は、北方領土問題について、あまり国民は関心がないような気がします。もっと多くの国民に関心を持ってもらい、多くの議論、多くの意見をみんなまで交わしていけたらよいと思います。だから、まずは広く国民に関心を持ってもらうことから始めたいのではないかと思います。

次に、アメリカとの連携を強くして、北方領土問題について協力を求めるべきだと思います。実際、アメリカの地図では、北方領土はロシア領として処理されています。アメリカだけではありません。ほとんどの国がロシア領として処理しているのが現実です。これから、日本の首脳や政治家は、会議で各国の首相や大統領などとうでしよう。もっとアジア以外の国々にも北方領土が日本のものだということを主張していかなければならないと思います。

また、日本が自信を持って主張していかなければならないことは、日ソ共同宣言についてのことです。この内容の中に、「平和条約を結んだ後に、歯舞群島、色丹島を日本に引き渡す。」とありますが、50年以上が経過しているのに、未だに平和条約を結んでいないのです。ここをもっと徹底的に主張していくのではないかと思います。時々、北方領土に関するニュースを見ても、総理は、「領土は日本のものです。」としか言っていないような気がします。もっときちんと理由を述べて強い姿勢でロシアと交渉に当たってほしいと思います。

今、日本は、外交関係で様々な問題があり、なかなか解決するのは大変だと思います。だから、この状況を見て尖閣諸島や北方領土などが狙われているのだと思います。今こそ踏ん張ってほしいものです。日本は、貿易などの国交を通して他国との関係をよくしていかなければならないと思います。だからこそ、何としても領土問題は解決してもらい、経済発展につなげてほしいと思います。

国同士の友好関係も保っていかなければなりません。主張するときは、強く、はっきりと主張していかなければなりません。バランスのよい解決をしてほしいと望んでいます。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

意識の差・無関心な私たち

京都市立西京高等学校附属中学校

三年 竹内 美晴

日本という国は小さく、資源が乏しい上に列島である。列島というからには無人の島もあり、その間を海が隔てているわけで、そこに管理の難しさが一つある。他国との領土問題はそのような無人の島をめぐっている。資源がある島ならばなおさらで、今も竹島や尖閣諸島で対立が続いているのは周知の事実だろう。

領土問題の中でも解決がかなり遠いと私が思うのが、北方領土だ。先に例に挙げた二箇所とはまた性質を異にしている。なぜなら北方領土は一時期ロシアが占領しており、その時人が移住してきているからだ。住民がいる島ということは、当然議論に彼らが深く関わってくることもである。一度住んでしまったら動きたくないし、既に移り住んだ人々の世代は交代していて、北方領土が故郷となった若い世代もいる。彼らの大半は定住を望んでいるし、ロシア政府も北方領土はヤルタ会談で認められた領土だと主張している。

一方日本はというと、以前島に住んでいた人々は老いており、彼らの子孫は本土などで生まれ育っている。島の返還は望んでも、島への帰省を望む人々はロシアのそれよりも少ない。一番意見を出す権利を持つ島の元住民とその子孫の島への強い執着は全体として見るとあまり

見いだすことはできないように感じる。その点で日口の執着・熱意の差がある。日本政府は戦後北方領土の返還をロシア側に求め、交渉を続けてはいるものの、やはりまだまだ解決への道のりは遠いのが現状だ。

問題の解決のためには、まず私たちの意識を変える必要がある。縦に長く横たわるこの国の最北端の先という地理的な距離は埋められないが、関心をもち、調べ、自分自身の意見をもつことは世代が交代してしまってもできることだと思う。私たち一人一人が自分で導き出した答えをしっかりと持つことができれば、その知恵を集めることが可能になる。そして領土問題の解決へ一歩前進できるはずだ。それは他の領土問題についても言えるだろう。

大切なのは愛国心のみや感情のみで考えてはいけないことだと思う。客観的で公正な信用できる資料をよく吟味し、メディアに踊らされることなく、情報を分析することだ。

日本は世界の中でも最も安全で平和な国の一つだとよく言われるが、その環境の中で日本人は少し平和ボケし、無関心な人が増えている。領土問題は資源の問題にも深く関わるので、必ず私たちにも影響を及ぼす。日本人全員が北方領土などの問題についてよく考えていくべきだと思う。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

私たちと北方領土

宮津市立養老中学校
三年 泉 梨沙

私たちが住んでいる日本。ここには竹島、尖閣諸島、そして北方領土といった多くの領土問題を抱えている島々がある。これらは、日本が主権を持つているが、最近、この領土に関するニュースが多く流れている。

十一月一日、ロシアのメドベージェフ大統領が北方領土の一つである国後島を訪問した。第二次世界大戦の直後、旧ソ連が四島を占拠して以来、首脳としては初の北方領土入りとなった。

その一ヶ月後の十二月二日、これに対して危機感を募らせた元島民や返還運動関係者、国會議員ら約500人が東京・銀座でデモ行進を行った。この運動に参加した人々は、どのような気持ちで参加したのだろうか。北方領土が占領されてからずっと、元島民たちにとつて、「ふるさと」の存在はとて大きく、決して忘れることのできないものだ。自分が、もし同じ目にあっていたら、と考えると、元島民の方たちの苦しみや怒りが少しわかるような気がする。

北方領土を追い出された日本人は、約17000人。元島民の人たちは、ずっとふるさと・北方領土の返還を求めている。しかし、「歳月は人を待たず」という言葉

のとおり、時間は、あつという間に過ぎる。そして、多くの元島民は、自分のふるさとが返還されるのを見ることができないまま亡くなっている。

今の日本では、北方領土の返還は、元島民だけの願いではなく、京都府でも、北方領土返還要求運動は行われている。1982年9月3日、京都商工会議所講堂で、それまで別々に北方領土返還要求運動に取り組んでいた青年、婦人団体など13の民間団体が一つにまとまって運動を展開する必要を話し合い、府民会議を結成した。毎年、2月7日の「北方領土の日」を中心に市民の集いを催して、北方領土についての映画を上映したり、講演会を行ったりしている。京都府だけでなく、他の場所でも様々な活動をしている。

では、なぜいろいろな活動をしているのか、北方領土の問題が解決しないのだろうか。それは、日本とロシアがもつと真剣にこの問題に向き合おうとしないからではないだろうか。日露間での主張が違ふということが大きな原因となっている。ならば、しっかりと話し合い、両国が納得できるようにすればよいのだ。

私は、今まで北方領土についてあまり詳しいことは知らなかったし、自分には関係ないことだと思っていた。しかし、北方領土は日本のものだから、日本国民みんなが守っていくことが大切になってくる。自分には関係ない、という考えを捨てる。そうすることで、一歩でも前進できると思う。国民一人ひとりが気持ちを一つにして、問題を解決していくことが大切なのだ。

優秀賞（京都新聞社賞）

知る義務がある

京都市立北野中学校
三年 田口 千裕

十一月一日、ロシアの大統領が北方領土を訪問した。各新聞でも大きく取り上げられていたが、私は特に何も思わなかった。それはロシア側も自国の領土だと認識しているのだから仕方ない、と思つたからだ。でも、一番大きな理由は、北方領土について何も知らなかったからだと思う。私が北方領土問題で一番驚いたのは、日本の領土だという根拠がすっかりあつたことだ。日魯通好条約や樺太千島交換条約でも北方領土がロシア領であることは全く示されていない。日本はこれらの条約を根拠に北方領土が日本固有の領土だと主張している。私も、この条約はロシア側が、北方領土が日本の領土であると認めていたことを示すと考える。しかし、現在、ロシアは北方領土をロシアの太古からの領土だと主張している。この主張は元々北方領土にアイヌ民族が住んでいたことを考えれば通らないのではないだろうか。また、北方領土返還を願っている人がたくさんいることも知つた。何も知らなかった自分との温度差に驚いた。元島民の人たちは、自分の故郷を追われ、散り散りに暮らしている。しかし、その人たちの数と同じだけのロシアの人が、今、北方領土に住んでいる。だから、安易に返還だけを要求するのは間違つていゝと思う。

私はロシアの人も、日本の人も北方領土で暮らせるのが一番良いと思う。でも、そうなつた時に住民が気持ちよく暮らすためには、やはり主権を明確にしておく必要があると思う。だから、主権がはっきりしていない地域を大統領が訪問するのはおかしいと今は思う。元島民の人にとつて大統領の訪問は、悔しく、悲しい事だつたらう。国どうしの争いが国民どうしの争いに発展すれば、問題の解決は難しくなるのではないだろうか。

私が感じた、自分と返還要求をしている人との温度差はたくさんの人に当てはまると思う。私のように何も知らない人も多いであらう。今、大統領の訪問は領土問題に目を向ける良い機会になつたのかもしれない。

四島の返還を実現するには、国民と政府が一体となつて行動していかなければならない。そのためにも国民には両問題を知る義務があり、政府は国民へ働きかける必要がある。これからは、国民が日本の領土であるという意識を高めると同時に、日本とロシアの両面から問題を考えなければならぬ。今、北方領土に住んでいるロシアの人たちを元島民の人たちと同じ目に遭わせないためにも。

優秀賞（京都新聞社賞）

北方領土問題について

綾部市立豊里中学校
二年 大槻 佳奈子

北方領土とは、日本の領土でありながら、ロシアに不法占拠されている島々のことです。

もともと日本は、ロシアよりもずっと昔から北方領土とかかわってきました。その頃のロシアの地図には、北方領土は、日本の国としてかかれています。不法占拠が始まったのは第二次世界大戦直後です。ソ連軍は、当時の条約を破り、日本の北方領土を攻撃、占領しました。北方領土の歴史を見ると、北方領土は、日本のものではないです。地図を見ても、北海道の納沙布岬から歯舞群島まで3・7kmしか離れていません。

この北方領土の水域で漁をしていて、ロシアからの銃撃によって人が出たり、船が沈没してしまったりしたこともあります。2006年には、日本の漁船がロシアから銃撃を受けて拿捕されました。このとき、一人の乗組員が死んでしまったのです。北方領土がロシアに占拠されたために死者やけが人が出ているのです。これはとても大変なことだと思います。これ以上、犠牲者を出さないためにも、少しでもこの領土問題を解決してほしいです。

占拠された当時、島には17291人の日本人が住んでいました。半分の人々は、ソ連軍の厳しい監視の中を

逃げてきました。それ以外の人々は、島に残りましたが、ロシアによって引き揚げさせられたのです。このとき、島から脱出した人たちは、自分の家や土地を捨てて逃げなければいけません。もしも、自分が同じ状況で故郷を捨てなければいけなかったら、簡単に決断はできなかったと思います。島の人たちは、本当に辛かったです。今、その人たちは、北方領土でない、どこかで普通に暮らしています。でも、そこは、その人たちの故郷ではありません。

私は、お盆には父、母のどちらの家のお墓にもお参りをしてきました。これまで、毎年してきました。でも、故郷を追い出された人々には簡単にはできません。私が今住んでいるところは、私の故郷です。ここは、私が将来大人になっても、いつでも帰ってくる事ができます。でも、北方領土を追い出された人々たちは、故郷をロシアに奪われました。故郷に帰るということが簡単にできないのです。

北方領土問題によって、日本はたくさん被害を受けました。北方領土問題は、少しでも早く解決しなくてはなりません。でも、北方領土からロシア人を追い出し、もう一度日本人が住むことは解決ではないはず。今、北方領土には、約17000人のロシア人が住んでいます。家をもち、子どもは学校へ行って勉強をし、私たちと同じように生活しています。そこがその人たちの故郷なのです。この人々を追い出せば、いくら条約を守り、武力を使わず、正しいやり方であっても、昔のロシアと同じことを日本がすることになるのです。

日本人とロシア人が同じ島で平和に暮らすこと、それが私の考えたこの問題の答えです。

優秀賞（KBS京都賞）

私が考える「北方領土問題」

京都市立洛北中学校
三年 藤 小百合

現在の日本にはいくつかの問題がある。その一つが「北方領土問題」である。北方領土問題とは、第二次世界大戦の末期、日本がポツダム宣言を受諾し、降伏の意図を明確に表明したあとに、ソ連軍が北方四島に侵攻し日本人島民を強制的に退去させ、現在もおお不法に占拠し続けていることをいう。

私が今回北方領土について関心をもったのは、テレビで元島民の方のドキュメンタリーを見たことがきっかけである。自分たちの故郷が突然他国によって占領され、住み慣れた土地にもう一生戻れない悲しみは、私たちには計り知れないほどの想いである。しかし、ソ連の占領から早六十五年が経ち、元島民の平均年齢は七十六歳をこえている。一度も故郷に帰ることができないまま亡くなられた方も多い。現在返還運動をされている方も、もう若い人ばかりではない。そんな時だからこそ未来を作っていく私達若者が、

島民の方々の意思を受け継いで、より活発な返還運動を推し進めていかなければならない。

ただ、このことについて気になることがある。一つめは「北方領土問題の風化」である。普段生活していても、返還運動などのニュースはほとんど聞かず、新聞でも北

方領土問題の記事を目にすることは少ない。これでは日本人ですら、北方領土問題を知らない人は多数いるのではないだろうか。いま一度、国民一人一人が、身近な問題として認識することが必要である。

そしてもう一つ気になることは、現在北方領土に住んでいるロシアの人々が、北方領土が自分たちの故郷だと、強く思いはじめていることである。確かに占領したのは六十年以上も前のことであり、若い人たちならば自分たちの「故郷」となっているのは不思議ではない。もし日本に北方領土が返還されたとしたら、ロシアの人たちの中にも、六十五年前の元島民の方と同じ想いになる人は必ずいるであろう。北方領土問題を平和的に解決するには、こうした様々な視点から総合的に考えることが重要になってくる。そのため第一歩は、日本とロシアの国民が北方領土への正しい理解と認識を深めること。政府レベルでの交渉はもちろん必要だが、国民レベルでの民間外交という方法も国内の世論を高め、相互の理解と関心を深めることに役立つであろう。また日本人が力を入れている環境エネルギーやハイテク産業などの技術面での協力も、解決への糸口につながるのではないだろうか。

北方領土問題は元島民の方ばかりが頑張るだけではでなく、日本人全体が一つとなり解決に向かわなければならぬ問題である。一人一人にできる事は小さなことだが、自分たちの問題としてとらえ、多くの人に伝えていくことが最も有効な方法になる。私も北方領土の今後に関心を向けながら、伝えるという身近にできることから取り組んでいきたい。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土とわたしたち

南丹市立園部中学校
三年 岡 英里奈

北方領土は、日本のものだと思はう。日露通好条約で、四島は千島列島に含まれていない。それに、太平洋戦争で日本とロシアは日ソ中立条約を結んでいたのに、それを破って終戦間際に戦いに加わり、北方領土に侵攻したことに納得がいかない。しかし、ロシア側からしてみれば、好漁場で資源豊富な暮らしやすい、そんな場所を今更手放したくないだろうし、私も、そんな土地なら争いになっても絶対自分のものにしておきたい。

私には双子の弟がいる。二人は、小さいときによく一つしかないおもちやを取り合ってけんかをし、泣くことがあった。毎回收拾のつかないけんかに半分仲裁をあきらめていたが、彼らはそのうち解決策を自分たちで発見したようだった。「一つしかないものは、二人のものにしよう。」

北方領土返還の交渉がこれほど長引き、解決に至らないのは日本・ロシア双方の主張があるからだと思う。両国ともに相手に譲れない事情がある。しかし、このままでは何も変化のないまま年月が流れていき、日本側に不満が募り続ける。仮に強引に日本に北方領土を返してもらっても、ロシア側に不満が残るだろう。争いというのは、ちよつとしたことや日頃の不満の積み重ねで起こる

のだが、両土問題となると、いつその不満が爆発し、戦争という最悪の解決方法に至ってしまうかわからない。だから、私は次のように考える。

「北方領土を両国の交流の場にしてみてはどうだろうか。」というものだ。なぜなら、世界ではもうすでに同じようなことをしている地域もあるからだ。南極大陸である。南極大陸にも豊富な地下資源があるが、最初に到達した一国が支配するのではなく、全世界共有のものとして調査・研究されていると聞く。また、現在進められている宇宙開発においても、それぞれの国が技術を出し合っている。将来、もし月に住むことが可能になった場合にも、月は共有のもの、みんなのものという考えが大切になってくる。自国の利益ばかり追求しては、研究も進まないし、争いを生むばかりだ。

北方領土問題を考える中で、私は色々なことに気付かされた。これからの世界に必要なのは「世界全体の利益」を考える視点だ。地球温暖化の問題、貧困の問題、感染症の問題。今の世界には、一国だけの努力では解決できない問題がたくさんある。言い換えると、一国の利益ばかり優先しては、解決に至らない問題をたくさん抱えているというのだ。だから、北方領土の問題をそんな国際協調の出发点の一つにしてみたらどうかと考える。勿論、そんなに簡単にいかないことはわかっている。しかし、以前私の弟たちがしたように、大切なものだからこそ二人で使おう、分かち合おうというこの方法が最も解決に近いのではないかと思うのである。

佳作

北方領土問題と私たち

京都市立京都御池中学校
一年 川口 麗奈

国後島、択捉島、色丹島、齒舞群島の北方領土は、日本の領土ですが、一九四五年から今もロシアに占拠されています。北方領土に昔は日本人が住んでいましたが、ロシアに占拠されたため、住んでいる人もロシア人です。この問題から、日本の多くの人々は、もともと日本の領土であった北方領土を返還してほしいと強く求めています。しかし、いまだ実現されていません。

このような事実があることから私は、日本の国民一人一人が、この北方領土問題を理解し、関心を持ち、意識する。自分に今できることは何なのかを考える。そして、これからこのことについて声をあげていく。ということが大変なのではないかと考えました。また、北方領土問題の解決にたとえ時間がかかるとしても、それまで努力し、北方領土の返還への意志を強く持つことが大切だと思いました。実際、自分もこのことについて何も知らなかったのですが、知ったことによつて返還してほしいと強く思っています。

なぜなら、北方領土は日本の領土なのに不法にロシアが占拠するという権利はなく、ここであまり関心を持たなかったら返還されるということはなくなると思ったからです。もう一つは、一人一人が問題のことについて意

識すると、それで少しずつでも行動に移せていけると考えたからです。また、その行動が積み重なれば、どんな思いが強くなり、少しでも返還に近づいていけると思ったからです。実際、北方領土返還への活動なども行われています。自分達が少しでも協力してあげたいなと思えました。ロシアと日本が交流を深められたら、国どうしでもよくなるだろうと思うし、今回のこの問題にも関わってくれると思うから、交流も大切なことではないかなと思いました。

また、ロシアと日本の間で解決が望まれている漁業問題や拿捕問題、他にも北方領土以外で問題になっている竹島の領土問題や、最近よく耳にする尖閣諸島問題など様々な問題が残っています。その一つ一つの問題が時間がかかろうとも一つでも少しずつ、解決の方向に向かつていけたらいいなと思いました。

これから自分は、できることには協力して強い意志を持っていこうと思えました。そして、元島民の方の気持ちも考えていきたいです。今回、こういう問題を知って知らなかったことも知ることができたから、ニュースとかにもまた、注目してみたいと思いました。

佳作

解決への糸口

京都市立西京高等学校附属中学校
三年 三木 杏珠

ニュースでよく聞く「北方領土問題」。日本とロシアの領土問題としか認識していなかった私は全くの無関心であった。そんなある日、何気なくニュースを見ていると「北方領土問題」についての特集が取り上げられていることに気付いた。そこには北方四島に住む日本人の悲しみの声があった・・・。

「早く返還してほしい。」「安心できない。」取材に応じた人々が口々に言う言葉である。随分前に見た特集なのに、今でも悲しみにあふれたその顔と声を覚えている。北方領土問題の経緯を見てみると、ヤルタ協定以外、北方領土は一貫して日本の領土である。ロシア側の主張は、米英ソ間のヤルタ協定でソ連の対日参戦の見返りに千島列島をソ連領とすると記しているためロシア領である、というものだ。しかし、ヤルタ協定は秘密協定で、日本は参加していないので拘束されないはずである。また、連合国が大西洋憲章カイロ宣言の中で合意した領土不拡大原則にソ連（ロシア）は違反している。さらに、サンフランシスコ平和条約で放棄した千島列島に北方四島が含まれていないことは、条約起草国の米英が認めている。ここまで日本の言い分がそろえば日本側は圧倒的有利と行っても過言ではない。だが、この問題に解決の

糸口は見えていない。それはなぜだろう。

私が思うに、それは北方領土に関する熱意の差が原因なのではないだろうか。日露世論調査で四島に住んでいた日本人に、返還が実現したらすぐにでも故郷の島に帰りたいか問うと、約四二%の人が「帰る気なし」を選んだ。「すぐに帰りたい」を選んだ人はわずか一二%だった。私がニュースの特番で見た人々の思いとの温度差があることが分かる。さらにもっと大きな温度差がある。それは・・・自分自身だ。以前の私は「北方領土なんて私には関係ない」と思っていた。今もお、苦しんでいる人がいるのに。悲しんでいるのに。しかし、そう感じているのは私だけではないはずだ。日本国民全体に、温度差があるのではないだろうか。

私たちは、すでにある社会に生まれてきたが、この社会はどうにも変わりようのないものではない。私たち一人一人の努力によつてよくもなり、逆に悪くもなる。二十世紀は二つの世界大戦と冷戦に示される戦争の世紀であった。しかし、今は違う。文化の多様性が尊重される世界、争いが起こらない平和な世界を二十一世紀に築くためには、文化交流と文明間の対話を深め、相互理解をする必要がある。将来を担う私たちが、領土問題に関する知識をまず身に付け、解決へと切り開いていかなければならないのだ。

佳作

北方領土問題の解決にむけてできること

京都市立藤森中学校
三年 荒木 萌子

北方領土問題とは何か？ 今まで私は、こんな事を考えた事がなかった。社会科がきらいだし、めんどくさいと思っていたからだ。でも、この作文を書くにあたって、今まで目をそむけていた事について、真剣に考えてみる事で、私の社会科への考え方や思いががらっと変わった。ただ、北方領土について考えるだけでなく、なぜ、社会科を学ぶのか、という事までも、考える事ができた。

北方領土とは、北海道の北東洋上に連なる「歯舞群島」「色丹島」「国後島」及び「択捉島」の事である。この北方領土は日本人によって開拓され、日本人が住み続けた島々だ。しかし、一九四五年（昭和二十年）八月の第二次世界大戦終了直後、ソ連軍により不法に占拠され、日本人の住めない島々になってしまった。そして、大戦後、六十年以上が経過した今も、北方領土はロシアの不法占拠の下に置かれているのである。

北方領土の日本人が建設した建物は、戦後、次々と取り壊されてしまった。この事実を知った日本人は、どう思ったのだろうか。自分たちの島を奪われ、建物を壊され、きつと悔しかつたはずだし、何もできないはがゆさを感じたはずだ。そういう思いの人々がいる限り、絶対に北方領土を取り返したいと思う。しかし、現在の北方領土

には約一万七千人ほどのロシア人が生活している。ただ、北方領土を取り返すだけでは、このロシア人はどうなってしまうのだろうか。日本の時のように、ただ同じ事を繰り返すだけになってしまふのではないか。私たち日本人は、私たちの島を占拠される「苦しみ」「悔しさ」を誰よりも分かっているはずだ。だからこそ、ただ取り返すだけになってしまふてはいけないと私は思う。北方領土問題を、本当に解決するためにはどうすればいいのか、できる事は何か、という事を考えていかなければならないと思う。考えていくために、日本について、ロシアについて、もっともつと知っていこうと思った。

社会科がきらいな私だが、初めて楽しいと思った。ロシア、日本、色々な目線から物事を考えていくにつれ、色々な人の思いがある事が分かった。地理・歴史等を見るだけじゃない。そのうらでたくさんの思いがある事を理解し、未来につなげていく事を考える事が、社会科を学ぶという事だと思ふ。北方領土問題について、何か行動を起こす事はまだまだ出来ない。しかし、ロシアと日本、双方の立場から北方領土問題について考え、たくさんの人の思いを大事にしたいと思う。それをできるだけたくさんの人に伝えていく事が、今の私の精一杯だ。だが、この精一杯を大事にして、北方領土問題の解決につなげていきたい。

佳作

「北方領土問題」を死語にするために

京都市立大淀中学校
二年 吉田 凌祐

私は一日も早い「北方領土問題」の解決とその言葉が死語になることを願っている。そして日本国とロシア連邦の両国が、平和的・友好的な関係を築き、共にいっそう発展してくれることを望んでいる。なぜならば、それは日露間だけでなく、世界の平和と安定にも大きく寄与する事だからである。

はじめに確認しておきたいことは、「北方領土問題」が生じた責任は、すべて当時のソビエト連邦、すなわち現在のロシアにあるということである。それを歴史的な視点から説明すると次のようになる。第二次世界大戦当時、日本とソ連は「日ソ中立条約」を結んでいた。つまり日本とソ連は、決してお互いを攻撃しないという約束をしていたのである。しかしソ連はその条約を一方的に破棄して日本を攻撃した。これは国際的な取り決めに無視する暴挙である。更に許せないことは、ソ連が北方領土を攻撃し、占拠したのが昭和二十年八月十五日のポツダム宣言の受諾後、すなわち連合国側への降伏後だということである。つまり、第二次世界大戦の終結した後には北方領土に乗り込んできたのである。日本はすでに軍事的な抵抗を停止し、先に述べた条約のとおりソ連が攻撃してくると思っていなかったので、ソ連にしてみれば

簡単に占拠できたことだろう。その上ソ連は住民を追い出したりシベリアに連行して酷使したりしたのである。当時の島の人々の苦しみを思うと日本人として大きな悲しみを禁じ得ない。このように、私たちが北方領土の返還を要求することは正義を実現してほしいという事であり、当然の権利を主張しているだけである。

そもそも北方領土は日本人が発見したところである。一六四四年、江戸幕府は「正保御国絵図」を編纂するために諸藩に「国絵図」の提出を命じたが、この時松前藩が幕府に提出した自藩領地の地図には既に「くなしり」「えとほろ」など三九の島々が書かれている。

一方、ロシアが初めて千島を探検したのは一七一一年のことであり、ロシアが当時作成した地図には北方の島々が「オストロワ・アポンスキヤ」、日本語で「日本の島々」と明記されている。このことから北方領土が日本固有の領土であることは明白である。

北方領土では、アイヌ民族と日本民族が長年にわたって仲良く平和に暮らしてきた。北方領土は豊かな自然に恵まれている。それは海流の影響である。冬の気温は寒すぎず、夏もそれほど暑くなく、海産資源も豊富で世界の三大漁場に数えられている。また、海、陸ともに哺乳類や鳥類が住んでおり、森林資源も豊富である。

このように、非常に価値のある島々なので、ロシアが返還したくないのもわかるが、勝手に占拠しているので早期の返還を望む。そのためには、日本が官民一体となり、国を挙げて全力を尽くさなければならぬと考えている。

佳作

北方領土について思ったこと

京都市立弥栄中学校
一年 橋本 霞

私は北方領土問題というものをくわしく知りませんでした。ロシアが日本の領土を占領しているということ位しか知らなかったのです。

「あんなに領土が広いのに、なんでもっと領土をほしがるのだろうか」と、疑問に思ったことも何度もありました。日本はロシアと比べて領土がせまいのに、小さな日本から、領土を無理に占領したロシアに「領土を返せ！」と思うこともありました。ロシアが領土を奪ったから、約一七七千人の人たちが住む土地を奪われました。その人たちは、都道府県各地で生活をおくっていることを知りませんでした。中には、きつと北方領土でもう一度生活をおくりたいと思っている人もいるかもしれません。その人たちのためにも私は早く北方領土が返ってきてほしいと思っています。

でも、戦争になつてほしくはないです。わたしは戦争というものを体験したことはありません。でも、私の祖父母は戦争を体験していて、たまたま戦争の話私に聞かせてくれます。「寝ていると、突然空襲警報が鳴って寝るひまもなかったよ」と。曇った空に戦闘機が飛び、落ちた爆弾で家やビルなどが焼けていることを考えただけで恐くなります。だから絶対に戦争だけにはなつてほし

くないです。

では、どうすればロシアの人々と仲良しのまま領土問題を解決できるのかなって考えました。今の日本は、話し合つて問題解決を試みているみたいですが、今もまだ北方領土が日本にかえっていないことを知りました。無理に日本から奪ったのだから、日本も無理に奪いかえしたらいんじゃないかという考えも頭にうかびました。でも、「北方領土と私たち」を見て、日本人とロシア人が仲良く交流している場面を見て、やっぱりロシアの人たちとも仲良くいれて、誰も不快にならないような話し合いをして、解決してほしいと思いました。そうすれば、ロシアと日本も今よりも、もっと仲良くなれると思います。

もしも、私が大人になるまでに北方領土が日本にもどり、ロシアと日本が仲良くなつていたらいいなと思いましたが。そして、今、私が住んでいるところは北方領土から遠いところだけど、いつか北方領土に行つて、北方領土に住んでいる人たちと仲良くなりたいです。

佳作

北方領土と私たち

亀岡市立東輝中学校
二年 大西 佑佳

北方領土問題について、私は、日本がもっと強くロシアと交渉しなければならぬと考える。私は、今まで北方領土問題について詳しいことはあまり知らなかった。終戦から何十年も経過しているのに解決しない。こんな大変な問題なのに、私のように詳しいことは知らないという人は、大勢いるはずだ。だから、日本政府がロシアに何度も返還を求め、ニュースや新聞で私たちが知る機会をつくるべきではないだろうか。

私は、授業で北方領土について学習し、元島民の方の体験談を聞いて、もっと詳しく知りたいと思い、インターネットを見てみると、日本とロシアの北方領土に対する意見が食い違っていることがわかった。日本側は、北方領土は一度も他の国の領土になったことがない日本固有の領土だから、北方四島を「返還」してほしいとしているのに対し、ロシア側は、日本は、サンフランシスコ条約で千島列島を放棄し、その中に北方領土は含まれているので、領土問題自体存在しないとしている。そして、四島のうち二島は、「引き渡し」てもよいとしているのだ。さらに、ロシア人は、北方領土についてよく知らないこともわかった。国民の理解なしでは国は動かせないのです、これでは問題は解決しない。

双方の意見の食い違い、国民の理解のどちらにおいても、日本とロシアは、もっとお互いに知り合うべきだと考えた。また、日本は、いろいろな解決策を提案してきたこともわかった。その中で、北方四島の面積を二分するというのがあった。しかし、それをすると、日本は領土を譲つてくれるということになり、中国や韓国など、他の国との領土問題も発生する。実際に、中国とは尖閣諸島をめぐる問題が起きている。だから、その案ではなく、やはり、北方四島を返還することを要求しなければならぬと思う。

ここで、北方領土が仮に返還されたときのことを考えてみた。そうなった場合、ロシア人の現島民の人々は、追い返され、子どもたちは故郷がなくなってしまう。そうならないために、私は、ロシア人が日本の北方領土に移り住んできたという形で、元島民の人々と一緒に暮らせればよいのではないかと考えた。島は、自然を生かした観光地として整備し、また水産資源も豊富なので、漁業に力を入れ、それらに関わる仕事でロシア人も働けるようにすればよくなるかと考える。

これらのことから、解決策は、日本がロシアに対し、弱腰ではなく強く交渉を求め、また、日本人にもロシア人にも北方領土の真実を知ってもらうことだと思う。本当の平和を取り戻すために、日本人として外国とのかかわりを知り、できることをやっていきたい。

佳作

北方領土問題について

宮津市立栗田中学校
一年 飯田 雅哉

僕が北方領土のことを知ったのは、中学校地理の授業の時でした。その時、僕はなぜ問題になったのかと思います、北方領土についてもっと知りたいと思いました。

北方領土は、調べてみると結構面積が大きかったのでビックリしました。北方領土の総面積は、愛知県の面積と同じくらいだそうです。これを知って、日本がとても損をしていることが分かりました。

北方領土が日本の領土であることが初めて示されたのは、一八五五年のことでした。しかし、第二次世界大戦のときに、ソ連にことごとく占領されてしまいました。今でも、北方領土の返還活動が続いています。

北方領土の島には、約一六〇〇〇人のロシア人が住んでいます。ロシアが北方領土を返還すると、そのとき島に住んでいるロシア人が故郷を追われるのは、かわいそうな気もしますが、ロシア人にも北方領土は日本固有の領土だと理解してもらわなければなりません。そのためには、北方領土が日本の領土であることを強く主張することが必要です。

先日、ロシアのメドベージェフ大統領が北方領土の国後島を訪問しましたが、その目的は、北方領土のことでなく、プーチン首相に日本に屈しない強い大統領とい

うことを見せつけるためでした。この訪問は、ロシアにとつて失敗だったと思います。理由は、日本に対して挑発的な言動をとったことで、日本国民のロシアに対する感情がさらに悪くなってしまうからです。

北方領土には、美しい自然がたくさんあります。周辺の海では、タラ、カレイ、カニなどが豊富に獲れ、択捉島には散布山、国後島には爺爺岳があります。だから、ロシア人もこの島がほしくなって占拠したのかと思います。しかし、日本固有の領土を占領し、返還しないのは、日本にとつて納得のいかないことです。本当は日本の領土なのに、なぜ日本人が住めないのかと思います。

今、北方領土に住んでいるロシア人の中には、北方領土はもともとロシアのものだったと思っている人もいます。しかし、故郷に帰りたくても帰れない日本人がいるという事実を知ってもらわなければなりません。

僕たちの願いは、日本とロシアの間に友好関係を築きながら、一日も早く北方領土が返還されることです。そのためには、日本人、ロシア人のすべての人がこの問題のことを真剣に考えるべきだと思います。

佳作

「北方領土について」

京丹波町立瑞穂中学校
一年 岩崎 恭吾

僕は、北方領土について学習するまで、北方領土問題は、全く自分には関係ないことだと思っていたし、あまり詳しく知りませんでした。「北方領土は、日本人が住んでいて日本の領土だ。」と思っていました。

しかし、学習したことによっていろいろなことがわかりました。

一つ目は、日本固有の領土なのに、ロシア人が住んでいることです。日本人が住んでいるなんて大間違いでした。以前は、日本人が住んでいたけれど、終戦後にソ連に不法占拠され、日本人が追い出されたことを知り、とても驚きました。ソ連に対し抵抗できればよかったですけれど、第二次世界大戦で負けてしまったことで、日本には抵抗するだけの力がなかったのではないかと思いましたが。住み慣れた土地から追い出され、自由に帰ることも許されないことは、とても辛いことだろうと思います。

二つ目は、日本が不当な扱いを受けていることです。北方領土の島々を住みやすい土地に開拓したのは、日本本土から移住した人々でした。苦勞して開拓した土地を強引に奪われるなんてあり得ないことです。また、とても住みやすい気候で、水産資源も豊富なその島々に日本人が住めなくなつたということは、日本の大切な財産を

無理やり奪われたということになります。

三つ目は、一度北方領土問題の解決に向けて交渉が進んだことがあつたことです。一九九七年、橋本総理とエリツイン大統領とが会談し「東京宣言に基づいて、二〇〇〇年までに平和条約を締結するよう全力を尽くす」とことが合意されました。しかし、エリツイン大統領が一九九九年に辞任し、プーチン新大統領との間で度々会談が持たれましたが、解決できず、振り出しに戻ってしまいました。僕は、このときに解決できていれば、日本とロシアはもつと仲良くなれたと思います。本当に残念です。

四つ目は、返還運動についてです。戦後間もなく、北海道の根室から始まった返還運動は全国に広がり、署名は七〇〇〇万人を越えているということです。僕は、このことにとっても驚きました。自分には関係ないと思うのではなく、返還要求に協力しようという人がとても多いのです。日本はずばらしい国だと思います。

僕は、北方領土について学習し、北方領土問題は日本という国にとつて大変重要な問題だということがわかりました。一日でも早く解決されるように、日本国民が一つになつて取り組んでいかなければいけない問題です。返還に向けて僕にできることは何もないかもしれませんが。でも、そんな問題が起こっていることを知り、関心を持つことが大切なのではないかと思えます。

北方領土が返還されるまで時間がかかると思いますが、それでも返還運動を頑張つて続けてほしいと思います。

佳作

北方領土について

綾部市立豊里中学校
二年 柴田 壮悦

僕は、今まで北方領土の問題について、真剣に考えたことなどありませんでした。ただ、ロシアがかつてに日本の土地を奪って返してくれない問題だと考えていました。しかし、その北方領土の問題は、ロシアが攻撃を行わないという原則に反して、攻撃をしたり、アメリカが進駐していないと知って占拠したり、いろんなことがあり、そんな簡単な問題ではありませんでした。

今、ロシアは北方領土の半分なら返すと言っています。僕も、返してもらえないのなら半分でもいいんじゃないかと思いましたが。しかし、それはだめでした。北方領土には日本の人が住んでいました。北方領土は、その人たちにとつては一つしかないふるさとです。だから、半分の人だけがふるさとに帰ることができ、残りの半分の人は今までと同じ苦しみを味わうことになるのはよくないと思います。

また、もし半分だけを返してもらったとしたら、今、北方領土に住んでいるロシア人がふるさとを奪われてしまうことになり、日本の人と同じ苦しみを味わうことになるので、それもよくないと思います。このように、北方領土の問題はとても複雑で解決はとても難しいのではないかと感じます。

ロシア人が北方領土の四島を占拠したことは、後を考えず、自分達がよければそれでいいという考えで日本人を苦しませるよくないことだと思えます。

北海道の納沙布岬から約4キロメートルしか、齒舞群島の貝殻島までは離れていません。こんな近くに自分のふるさとがあり、見えているのに帰れないというのは、本当に悔しい気持ちだと思います。自分のふるさとまで、どんな小さい船でもいいから帰りたいという強い気持ちがあることも知りました。だから、本当に北方領土の四島をロシアから日本に返還してほしいと思います。

ロシアから日本に北方領土の四島を返還してもらうためには、僕たちがこの問題をしっかりと理解して返還に協力していくことが大切だと思います。日本に北方領土を返還してほしいと、ロシアに強く伝えることが大切だと思います。

ロシアが連合国の原則に反したり、強いアメリカがないとわかってから、北方領土四島を占拠したりしてきたことは許せないことだと思ふし、最低なことだと思ふので、ロシアが日本に北方領土四島を返還するべきだと思います。

でも、簡単にはいかないとも思います。だから、今までやってきたように、北方領土問題の解決に向けての活動を、今まで以上に、本当にしっかりとしていくべきだと思います。

佳作

日本国民として

京都府立園部高等学校附属中学校

三年 柴田 愛澄

「北方領土問題」、小学生の頃から社会の教科書には必ず載っている内容ながら、いまだに解決されていない問題の一つです。私が知っていたのは、日本の領土であるはずの歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島がロシアから返還されていない、そんな問題だということでした。

「日本の領土なら、返還してくれないロシアが一方的に悪いのではないか。早く返してくればいいのに。」と軽く考えていた私がいましました。しかし、そんな軽い問題ならば、今日まで解決されずに残っている訳がありません。もともとこの問題の出発点は、日本とソ連間の「千島列島」の認識が一致していなかったところにあるからです。日本もソ連も、「千島列島」は、ソ連の領土であると納得していても、肝心な「千島列島」が指している場所が両国で違えば、争いになってもおかしくはないと思います。しかし、北方四島に住んでいた人々からすれば迷惑な話です。強制的に故郷を出なければならなくなり、その後二度と故郷で生活することさえ叶わなかった人がどれだけいたことか……。北方領土問題の始まりがそんな勘違いだなんて、笑えません。

「当然あちらもこう考えてくれるだろう。」「そんなの当たり前だから大丈夫。」私たちの日常生活も、国の

トップ達がするような難しい会議でも、相手と自分は違う人間なのだから、考え方がまったく一緒であるはずがないことは確かです。だからこそ、自分の意見は積極的に、且つ分かりやすく述べていく必要があるはずです。常日頃からそれを意識するだけで、争いやいがみ合いへ発展してしまうことは減るでしょう。問題は、起きてから解決策を練るのではなく、起きる前の予防策がどれだけ考えられているかの方が、随分大事なことに感じます。

では、「北方領土問題」のように起こってしまったら、「日本」という一つの国が関わっているのだから、私たち日本国民は皆、関係者です。日本国民には、一人だつて無関係な人はいません。だからこそ、子どもも含めその問題について理解するべきです。子どもには難しいことだけれど、教科書に小さく「北方領土」と書いてあるだけでは自分たちの問題という気持ちは湧きづらいものです。なぜ起こってしまったのか、今、どのような対策を取っているのか、興味を持ったから調べてみたではなく、皆が常識のように知っていたならば、きっとよい解決法も見つかります。問題を解くには、問題を知らなければ何も始まらないのですから。

私たちには、この北方領土問題について考えていく義務があるでしょう。一刻も早くこの問題を解決するためには、「いつか帰ってくるだろう。」などと軽く思っているはいけません。昔、北方四島に住んでいた人々が再び故郷に住める日が早く来ますように。

佳作

日本国民として

京都府立洛北高等学校附属中学校
二年 中西 光歩

去る十一月一日、メドベージェフ大統領が北方領土を訪問した。私は、北方領土問題の平和的解決が少しでも進展するように見守っていた。しかし、そのような様子は全くなく、返還に応じようもしない大統領の姿に、落胆してしまつた。

私にとつて北方領土は、離れている上、もちろん行つたこともなく、全く身近になかつた。それに、自分が領土問題について考えたところで、特に意味はないと思つていた。しかし、今回の大統領訪問で、何ら事の進展も見られなかつたことが納得できず、真剣に考えることにした。

一四九五年、降伏し終戦をむかえたはずの日本にソ連が攻めてきた。島の人々は追い出され、ロシア人が島を占領した。これほど理不尽なことはないだろう。さらに、元島民の人の話によると、北海道移住後も元島民の人が領海内で漁業をしていたときに、ソ連軍が突然発砲して、船員が亡くなるという事件もあつたそうだ。このような目に遭つているのが、私たちと同じ日本人である。関係ないわけがない。しかし、その当時から、日本政府は、効果的な対応をせず、日本国民も長い間、目をつぶつて

きた。そして、私もその一人であつた。

北方領土問題の交渉を実際に行うのは、日本の外交の仕事であつて、私たちが交渉に行くことはできない。だからと言つて「関係ない」で良いのか。「関係がない」と思うのは、関心がないからだ。日本国民一人一人が北方領土に対して、高い関心を持つべきだと思う。これを少しでも実現するためには、「教育」という形で押し進めるのが適切なのではないだろうか。ただ、「ロシア人が悪い。」というような概念を植え付けるのは間違つている。北方領土についての歴史と正しい知識を身につけて、その上で自分達に何ができるのか、ということをしつかり考えることが大切だと思う。人間ひとりの力は小さくても、関心をもち、「関係のあること」と考える人が増えれば増えるほど、力も大きくなるのではないだろうか。

「交渉」というのは、自分も相手も納得しなければ成立しない。それが国と国の領土となれば、問題は大きく、交渉は難しくなっていく。時間がかかるだけでなく、忍耐も必要である。そのような中で、私は領土問題の平和的解決が少しでも進展するように、周囲の人の北方領土問題に対する関心を高めることから始めたい。

発 行

平成23年（2011年）2月5日

北方領土返還要求京都府民会議

〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議

〒600-8023 京都市下京区河原町仏光寺西入
京都市総合教育センター内